

被爆69周年原水爆禁止世界大会・ナガサキ大会 核と戦争のない21世紀を求め立ち上がろう 全国から1800名が参加

2014年08月7～9日 被爆69周年原水爆禁止世界大会・ナガサキ大会に参加

8月7日～8月9日の日程で被爆69周年原水爆禁止世界大会・長崎大会が開かれ、メイン会場となった長崎ブリックホールには全国から1800人が参加し、核兵器廃絶や脱原発に向けて大きな声あげました。全自交労連からは地元関係者をはじめ、愛媛地本や本部役員も参加し積極的に行動しました。

会場では全員で黙祷を捧げた後、川原長崎大会実行委員長があいさつし「被爆者や遺族の思いを踏みにじり、国民の声を無視して原発の再稼働や再び戦争の惨禍への道をひらくこととなる集団的自衛権行使を進める安倍政権と対決しよう」と力強く訴えました。続く主催者あいさつでは、長崎原爆の被爆者でもある川野浩一大会実行委員長が自らの被爆体験を語ったのち長い闘いの中で確立された「核と人類は共存できない」の言葉のもと、先の大飯原発の運転差し止め訴訟での歴史的な判決や滋賀県知事選挙における脱原発を目指す候補の勝利など反核平和にたいする国民の声は確実に広がってきていることを述べ、それらの国民の声に反する安倍政権と全力で対峙して行こうと呼び掛けました。

来賓あいさつでは、海外からの多数の来賓を代表して、すでに脱原発へと舵を切ったドイツより連邦議会議員のステフィ・レムケさんが「広島、長崎は核のない世界をめざして闘う必要性を教えてくれる場であり、今後も共通の闘いを進めていこう」と連帯の言葉を述べました。

会の終盤、運動継承の担い手となる「高校生平和大使」の伸びやかな挨拶や報告に続き、檀上スクリーンには「原爆ゆるすまじ」の歌詞と共に被爆時の長崎の写真が映し出され、運動の継続の重要性と更なる運動の発展に会場全体で心をつなげて合唱し会を締めくくりました。

翌日の分科会やフィールドワークでは参加者を振り分け、全自交の仲間はNBC別館ビデオホールで行われた第8分科会「見て・聞いて・学ぼうナガサキー証言と映像による被爆の実相と平和運動交流」に参加しました。ここでは被爆者の方々の生々しい体験や、核兵器はいかに非人道的であり、人類が生み出した最悪の兵器であるかという、体験者しか知り得ない話をビデオ映像と共に語られていました。その中で最も大事なことは、核兵器の早期廃絶とともに、戦争による惨状を繰り返してはならないという、至極当然ではあるけれども大変難しいということでした。被爆体験された方々の平均年齢は70歳を悠に超え、今後いかに実態を伝えていくのかが大きな課題となっています。私たちの住む日本は69年間戦争の無い時間を過ごしてきました。また、核兵器は69年前、長崎に投下され

たのを最後に人類に向けて使用されたことはありません。この事実は紛れもなく、広島、長崎への原爆によって犠牲になられた多くの方たちと、惨状の中で生き続け現在までその悲惨な体験を全世界に訴え続けてきた方たちの存在があったからこそ、核兵器の本当の恐怖、悲惨さを理解したからにほかなりません。「冷戦」といわれた時代、実際に核戦争危機に陥ったとき、それを思いとどまらせたのは、生身の人間に原爆を浴びせ、一瞬の閃光で数十万人を跡形もなくこの世から消し去り、数十万人を今なお後遺障害などで苦しめ続けている「威力」を、当該国の指導者自身も認めているのです。

「核と人類は共存できない」。それは核兵器であれ、原発であれ同じだと痛感した分科会であったと思います。原爆が投下された日と同じ9日の朝、爆風による「片足鳥居」が被爆遺構となっている坂本町山王神社での慰霊祭に参加し、代表献花をしたあと、10時半からブリックホールでの長崎市主催「長崎原爆犠牲者慰霊平和式典」に参加しました。

田上長崎市長による平和宣言の後、被爆者代表である城臺（じょうだい）美彌子さんの「平和への誓い」の言葉に強烈な思いを持ちました。体现者の言葉は非常に重い。心の底から、核兵器は勿論のこと戦争という過ちは絶対に犯してはいけないという思いが、戦後生まれで実体験のない私たちでもひしひしと伝わってくるものでした。なかでも現在、安倍政権が推し進めている集団的自衛権の行使容認については政府に対して「武力で国民の平和を作ると言っていないませんか。武器輸出もやめてください。戦争は戦争を呼びます。歴史が証明しています。日本の未来を担う若者や子どもたちを脅かさないでください。被爆者の苦しみを忘れ、なかったことにしないでください」と痛烈な批判をおこなっています。また、原発事故に関しては、「放射能汚染でいまだ故郷に戻れず、仮設住宅暮らしや、よそへの避難を余儀なくされている方々がおられます。小児甲状腺がんの宣告を受けておびえ苦しんでいる親子もいます。このような状況の中で、原発再稼働等を行っていいのでしょうか。使用済み核燃料の処分法もまだ未知数です。早急に廃炉を検討すべきです」と、被爆をしたサバイバーとして、残された時間を命がけで語り継ぐという決意を述べました。世界中の人に、再び愚かな行為を繰り返さないために、被爆の実相を語り継いでくださいという言葉が重く残った誓いでした。

フクシマ・ヒロシマ・ナガサキと続く、第69回原水禁世界大会は大会宣言で「核と戦争のない21世紀を」求めて人類が生き残るために立ち上がることを宣言し終了しました。